

学校で動物を飼うことの意義と飼育の実際

森下 典子

1 はじめに

新学習指導要領の生活科で「動物や植物の継続的な飼育栽培」が明確に位置づけられました。生命の尊さを実感を伴って学ぶことができるという点から、動物飼育が果たす役割はますます大きくなってきています。しかし、実際の教育現場はどうでしょうか。

かつて鳥インフルエンザの感染への恐れから、学校現場からチャボやニワトリの姿が消えてしまいました。それだけでなく、アレルギーを持つ児童への配慮から、ウサギの姿までも見えなくなってしまいました。動物飼育の重要性を感じ、教育の中に、動物飼育を取り入れようと思いつつも、「鳥インフルエンザは大丈夫かしら?」「アレルギーを持つ子どもがいたらどうするの?」「動物の世話はどうしたらいいの?」など、不安が先立ち、躊躇されているのではないのでしょうか。

そこで、獣医師や実践者から動物飼育の意義と飼育の方法について具体的に学ぶことによって、自信を持って飼育活動ができるようになると考え、動物飼育の実践発表と獣医師による講義・飼育実習という構成で、研修講座を実施しました。その内容と研修会の様子について、紹介したいと思います。

2 小学校生活科研修講座実施要項

(1) 目的

獣医師による動物飼育の講義・演習や継続的な飼育の具体的な実践をもとに、学校で動物を飼うことの意義を理解し、生命の尊さを実感させるための学校飼育の実際、指導の工夫について研修を行い、指導力の

向上を図る。

(2) 主催

福井県教育庁嶺南教育事務所

(3) 期日・会場

平成22年8月5日(木)

敦賀市粟野公民館

(4) 受講対象者

福井県小学校教職員 幼稚園教職員

(5) 講座日程, 講座内容

13:30~13:40 開講式

13:40~14:30 実践発表

14:40~16:20 講義・演習

3 実践発表

「継続的な動物飼育を通して、生き物を大切に
にする心情を育てる授業実践」

福井市豊小学校 久保三枝子先生

久保先生は、学級経営の中に生き物の飼育を位置づけ、長年にわたって実践をされました。今回は、福井県獣医師会発行の通信「ふんわり」にも掲載されているモルモットの飼育を通じた命の学習について、ご提示いただいた資料をもとに紹介します。当日は、実際に飼育されているモルモットを会場に連れてこられ、間近にクルルを見ながらのご発表でした。



<生活科や道徳を中心とした実践の流れ>

○「ようこそ レオ君」

学校探検で卒業生が残したモルモットと出会う。話し合いで学級の一員となる。



○「生きている音 ドクン ドクン」

自分の心拍音を心音計で聴く。自分が生きていることを実感。モルモットの心音に自分達と同じように生きていることに感動。

○「さよならレオ君 かけがえのないのち」

1年生の秋にレオが動物病院に入院。獣医師の大門先生の献身的な看病とレオの生命力から一命を取り留める。2年生の夏に、再度入院したが、死亡。突然の死に小さな胸が張り裂けそうになって体全体で悲しみと向き合って泣き続ける子ども達。お別れの時に、小さな手を合わせ、「ありがとう」と口々に言う。「どうして、ありがとうと言ったの？」という質問に、「だって、レオ君はいつも僕に元気をくれた」「レオ君を見ていると笑顔になっていつもあったかいハートをくれたの」と答える子ども達。

○「ありがとうレオ君 いのちのメッセージ」

道徳の時間に、モルモットの死をもとに話し合う。獣医師の大門先生をゲストティーチャーとして招き、レオが死ぬまでがんばったことや高齢で死を迎えたことのお話により、レオの生への強い思いに気づき、レオが残してくれた命のメッセージを考えることができた。（※道徳）

○「二代目の名前にこめられた願い・心」

レオと悲しい別れをしてから二ヶ月。子ども達から生き物を飼いたいという声上がる。

全員で話し合っ二代目モルモットを飼うことになった。元気よく育てて、「クルル」と鳴いてくれるようにと願って「クルル」と命名。

<道徳の授業実践について>

1 主題名 命のメッセージ

～ありがとうレオくん～3-(2)生命の尊重

2 資料名 「レオくん」(自作資料)

3 本時の目標

学級で飼育している動物の病気と死を通して、限りある命の尊さを感じ、命を大切にしていこうとする心情を育てる。

4 本時の展開

学習活動の流れ

○レオくんのことをみんなはどう思っているかを発表する。

レオくんはみんなにどんなことを教えてくれたのだろう

○自作資料「レオくん」を聴く。

○レオくんが病気になったとき、みんなやレオくんはどう思ったかを話し合う。

<p>みんな</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く元気に なって ・命を助けて ・がんばれ 	<p>レオくん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つらいよ ・生きたい ・負けないぞ 	<p>獣医さん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がんばれ ・助けたい
---	---	---

レオくんは生きるためにがんばった
レオくんはすごいな

○獣医さんからレオくんの闘病、死んだときのお話を聞く。

○みんなは、どんな気持ちでレオくに「ありがとう」といったのか話し合う。

- ・いつもみんなを楽しくさせてくれた
- ・かわいくてみんなに元気をくれた
- ・病気に負けないで生きようとした
- ・いっぱい思い出をくれた

○今日の学習で分かったことを発表する。

子ども達がレオの死について、真剣に向き合い、しっかりと考えたことで、命の大切さを実感として学び、子ども達を変容させたようです。

子ども達の変化について、下記のような様子が見られたとのことでした。

○道徳の授業の中では、獣医師からのお話（動物と人間の寿命の違い、治療に耐える姿、みんなとの出会いが動物にとって幸せだったこと、今も心の中でずっと生きていることなど）から、レオの生と死が子ども達の心に響き、話し合いを深めるとともに互いの考えを認め合うことができた。

○道徳の授業後、意味も分からずに「死ね・殺す」と暴言をはいていた子どもが、レオの死以来、「死ね」という言葉を使わなくなる。また、自分が「死ね」と言ったから、レオが死んだのではないかと悩み、獣医師

より原因が分かり、二代目のクルルを飼う時には本当に大切に世話するようになっていった。

○クルルが久保学級の一員となる。朝の健康観察では、「はい、クルル君は元気です。にんじんの葉をもりもり食べています。今日の体重は 1080 グラムです。」と子ども達が答える。子ども達は、健康で快適な生活にするために餌や掃除など、クルルの身になって考えるようになった。

○動物がいることで、家族との話題も豊富になり、生き生きと学校生活を過ごすようになっていく。

このように、レオの死をきっかけに、動物との接し方や世話の仕方にも変化が現われ、子ども達が、クルルとともに生活することで、成長していく姿がありありと感じられる実践発表でした。

久保先生は、「動物は、つらいよ。助けると話すことができない。だからこそ、動物の身になってその声に耳をすませてごらん。」と子ども達にいつも話されるそうです。動物飼育は、相手ことを思いやる心が自然と育っていくことになると言葉を締めくくられました。

現在も、子ども達のお世話と週末のお持ち帰り飼育への保護者の理解と協力、いざというときの県獣医師会の支援体制によって、動物飼育が継続されています。

久保先生の実践、特に、モルモットの死を通して、命の大切さを考えさせるご発表の場面では、涙を浮かべる受講者も見られました。受講者からは、「動物の飼育がこれほど、子ども達の成長に大きな影響を及ぼすとは知らなかった」「動物の飼育は、子ども達に必要な物だと言うことがよく分かった」「自分も動物飼育を取り入れた学級づくりをやっ

てみたい」といった感想が多く寄せられました。

4 講義「学校で動物を飼うことの意義と飼育の実際」

(社)福井県獣医師会 学校飼育動物対策委員長 大門由美子先生

社団法人福井県獣医師会では、平成14年度より、「子どもたちのために先生と学校を支援すること」を目的とした学校飼育動物支援事業を実施しています。大門先生は、その学校飼育動物対策委員長として、希望する学校に直接出向き、飼育動物の飼い方の指導や悩みや不安への助言、動物とのふれあいの楽しさを伝える活動に熱心に取り組まれています。今回の研修講座を実施するにあたり、現場の先生方にとって有意義な時間となるように、内容や動物とのふれあい方にも適切なお助言をいただいたおかげで、たくさんの受講者から好評を得ることができました。その時の内容と研修の様子について紹介します。

<学校で動物を飼うことの意義や

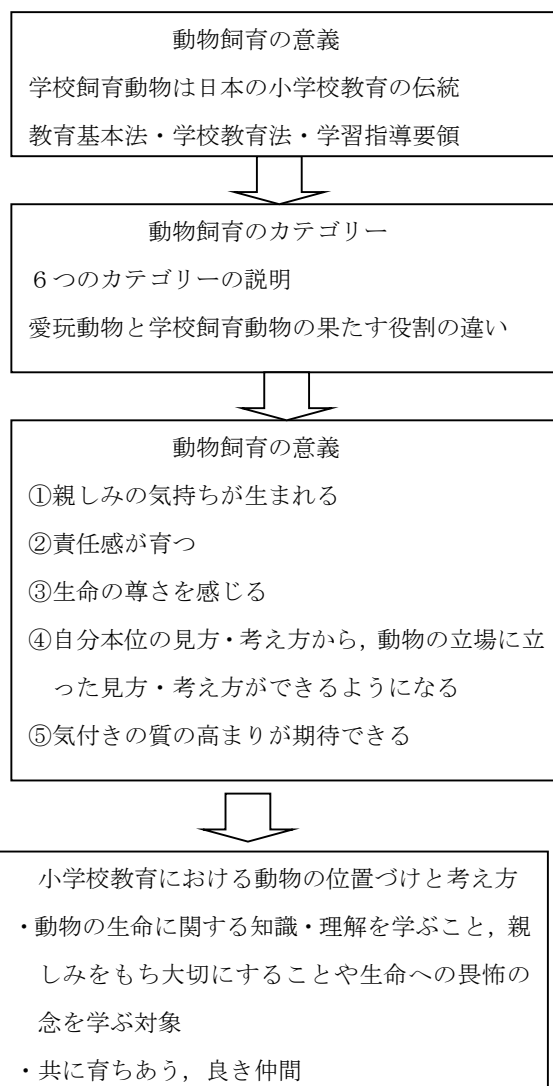
飼育の実際について>

大門先生は、学校で動物を飼うことの大切さや意義について、さらには、実際に飼育を取り入れていくために必要な知識や科学的



な視点について、法令、動物飼育のカテゴリ

一、小学校教育における位置づけ、飼育に適した動物の種類とその飼育法、鳥インフルエンザ等の病気、アレルギーへの対応、飼育環境等から、分かりやすく、丁寧にお話してくださいました。終始にこやかに、時にはユーモアを交えてお話されましたのでリラックスした雰囲気の中で、受講者は正しい知識を整理して理解することができたようです。



<小動物とのふれあい体験>

大門先生のご講義の後に、5グループに分かれてモルモット、うさぎ、チャボとふれあう体験の時間をもちました。学校飼育動物対策委員会の獣医師やスタッフの方々のご協力を得て、グループ毎にご指導をいただきま

した。机を診察台代わりにして、シートとバスタオルを敷き、まずは、動物の特徴、飼い方、抱き方のポイントについて説明を受け、心音の聴診体験や抱っこ体験、質疑応答という流れで実施しました。グループ活動にしたため、その時に思ったことやこれまでの悩みなど、気軽に質問をすることができたようです。また、動物とふれあいは、癒しの一時となり、にこやかな笑顔があふれていました。

受講者からは、「動物飼育に対して正しい知識を持って実践していけるので、とても自信がついた」「動物飼育は、子ども達にとってとても大切なものと分かった。2学期からさっそく取り入れていけるようにがんばりたい」という感想がたくさん寄せられました。また、長年動物が恐くて触れずにいた受講者が、初めて動物に触れたことの喜びを感じ、是非動物飼育を取り入れていきたいと話されたことがとても印象的でした。



5 終わりに

小学校生活科の新学習指導要領で「動植物の継続的な飼育」が重視されているのを受け、研修講座として初めて動物飼育の内容を取り入れたわけですが、受講者からの高い満足度と大きな反響を目の当たりにして、こうした機会を提供していくことの大切さを実感しました。動物飼育が子ども達の成長にとって与える影響を考えたとき、なくてはならない大切なものです。動物飼育に対する正しい知識やスキルを身に付けることによって、これまでの不安や恐れが払拭され、動物飼育の

取組みも自信をもって進めることができることでしょう。今後も、実践に直接つながる魅力ある研修会を企画し、動物飼育の実践が広まるように努力していきたいと思えます。



(福井県獣医師会)

06-08

